

「秀衡之家臣 こんごうべつとうひでつな 金剛別当秀綱 か す ぼうたろうひでかた 下須房太郎秀方 よへいろく 秀綱カ子 ぐあんずる 余平六 きん 愚按ニ、奥州ニ金氏アリ、余ノ
字、疑 うたがう ラクハ金ノ字誤リカ わかくろうだいぶ 若九郎大夫 たがわたのたろうゆきぶん 田河太郎行文 あきたのさぶろうむねぶん 秋田三郎致文 ともとうはち 伴藤八 きとうしやうじ 佐藤莊子
又湯庄司トモ、信夫庄司トモ云 ゆのしやうじ 伊賀良目七郎高重 い が ら め しちろうたかしげ 河邊太郎高経 かわべの たろう たかつね 佐藤三郎秀員 きとう さぶろう ひでかづ 金十郎 きんのじゅうろう
勾当八 こうとうや 赤田次郎 あかたのじろう 若次郎 わかじろう 河田次郎 かわたのじろう 此者殺ス泰衡ヲ ゆりのはちろう 由利八郎 これひき 東鑑卷ノ廿ニ由利八郎維久ト
云者アリ、此人ノ親族ナランカ隆実 たかざね 此人頼朝東征ノ時ノ囚人也、姓氏ヲ脱ス、郷説ニ栗原郡一迫庄長崎村ノ城 めしうど
主長崎四郎隆実ト云伝ヘリ、泰衡カ家臣ニシテ、義経討手ノ大将ナリト云、此人ノコトナルニヤ、豊前介 いちはさまのしやうながさき 清原実 ぶぜんすけ
俊 とし 橘藤五実昌 きつとうごさねまさ 実俊カ弟、大河次郎兼任同嫡子鶴太郎 おおかわのじろうかねとう 同次男畿 ちやくしつたるろう (比?) 内次郎 き ひ 二藤次忠 ないじろう 二藤次忠 にとうじただ
季 すえ 同新田三郎入道 じったのさぶろうにゆうどう 兼任ガ兄、熊野別当名取郡司 くまのべつとうなとりぐんじ 以上兩人ノ姓名ヲ不記 きさず 以上廿七人、東鑑ニ
出テ、秀衡・泰衡カ家臣也俊兼 としかね 此人姓氏ヲ脱ス、坂上季隆 さかのうえのすえたか 金清兼 きんきよかね 右三人、清衡経蔵寄文ニノ
スル処の家臣ナリ、照井太郎高春 てるいのたろうたかはる 一説ニ高直 ながさきのたろう 長崎太郎 ながさきのたろう 一説ニ名佐光 すけみつ 同次郎 じろう 以上三人泰衡カ家臣、
義経記ニ出 ぎけいき 姉齒平次光影 あねはのへいじみつかげ 郷説ニ栗原ニ迫庄梨崎村ニ居館ノ址あり、此地ヲ領セント云伝フ、
柴田四郎是則 しばたのしろうこれのり 里老ノ説ニ、秀衡カ家ノ子也ト云、柴田郡舟岡村ノ城ヲ柴田城 ふなおか ト云、又四保城トモ云リ、是則 しばたじやう
カ城ト云、東鑑卷之十六ニ、芝田次郎カコトアリ、此人ノコトナルニヤ、又ハ親族ナルニヤ、金沢九郎 かなざわのくろう 村老ノ説 そんろう
ニ岩 ながれのしやうかざわ 井郡流ノ庄金沢城主ニシテ、秀衡カ臣ナリト云、西條采女入道 さいじやううねめにゆうどう 桃生郡寺崎村沢山城主、秀衡臣 てらさき
ト云、沼倉小次郎高次、栗原郡三迫庄沼倉村ノ城主也、此人義経ノ屍 ぬまくらのこじろうたかつぎ フ我領地ニ さんのはさまのしやう 葬 しかばね シト云、泰衡カ ほうむり
家臣ナルヘシ、愚按スルニ、秀衡ノ臣、豈此人々ノミニ限シヤ、偶 ぐあん 記録又ハ郷説ニ残レル者 あに 偶 たまたま
右ノ如シ、近世印行ノ書ニ著ス処、信用シカタキ者多シ、故ニ不挙之」 これをあげず

友直のいう通り、これらは秀衡家臣のほんの一部であろうが、その地域支配の具体相はわからない。わずかに、苗字が支配地域のでがかりとなろうか。